
仮面ライダー DECAEDvsBESTvsAll Riders ~イノチノメグルタビ~

時流 明日無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー × 仮面ライダー

DEC AED VS BEST

VS ALL Riders

ソイノチノメグルタビ

【Zコード】

Z0439BA

【作者名】

時流 明日無

【あらすじ】

2010年…スーパーショッカーは壊滅、世界は平穏に戻ろうとしていたその時、全ての世界で何かが狂い始めていた… 全世界最大の危機が訪れる時、最強の破壊者と一番となる者、そして往年の仮面ライダー達と新しき仮面ライダー達、全てのライダー達が立ち上がる! 仮面ライダー × 仮面ライダー、ディケイド VS BEST VS ALL Riders! 彼らの奇跡の伝説は、止まらない…

始まりの始まり

「さて……と……」

そつしふやきソファーから立つ長身の青年が近くにいた女性——といつても青年と同じ年くらいの年齢であるうーーに話しかけていた。

「——の世界でやることも済んだし……そろそろ次の世界に行くか?」「わうですね、ではスクロールを……」

そう言つとその女は撮影の時に使つよつないたつて普遍的な形をしたスクロールを変える。すると何故か先ほどまで夜であつたのに周囲はすっかり日の光に満ち溢れていた。

先程このスクロールは普遍的な形と言つたがその壁紙は撮影で使つような代物では無い……いや、もちろん撮影で使つても良いのだが……

また通常のスクロールには無い“機能”が備わつている……
様々な世界……つまりパラレルワールドを自由に……ではないが移動できること……だ。

彼らは“様々な世界を旅する者”の一人であるフリー・カーメラマン“門矢士”とこここの写真館の主人の孫“光夏海”。奥にはこここの写真館の主“光栄次郎”がいつもの笑顔でコーヒーを入れてゐるのであらう匂いが漂つてきた。

……さて、読者の皆様は既にお気づきだろう?……彼らの仲間の一人が現

在までいないことに…

その仲間、“小野寺ユウスケ”は一年ほど前またま着いた“彼の世界”に戻ることになった。未確認生命体が暴れていたため彼の力が必要となつたのだ。

「ふう…」

最後の戦いを終え一息つくユウスケ。このため息とともにこの世界は永遠に生命の営みが平和であることが約束された…ただし、その代償は多くの命と彼の“死”を奪うこととなつたが…

空にはあの凄まじい戦いなどなかつたかのように青空が広がる。

「姐さん…俺…やつたよ…」

ポツリと今は「生き“愛する人”」に報告する。頬にはほんの一粒だけ涙が伝つた。

死を失うことがどれほど恐怖か…しかしそんなことはどうつてこと無いと思っているのかユウスケは一年ほど前別れた戦友達を思い返していた。

「士…夏海ちゃん…栄次郎さん…海東」

――

「さてと…そろそろ士達も着いた頃…かな?」

そう呟きながら道に立つてバイクに体を掛けている男…自称トレジヤーハンターの“海東大樹”だ。彼は士達の仲間…というより利害一致関係とのみ付き合い、利害が異なればすぐさま掌を返す…と言う感じだろうか?とにかく海東とはそんな男だ。

「だけど…何故このままなのだろうか…」

「…そういうながら愛車、マシンディエンダーに跨る。

「…TVで出なかつたって？」

それも当たり前だ、海東がこれを盗んだのは今から9ヶ月前、海東がたまたま立ち寄った世界で見つけ一目惚れしたものだ。皆様がご覧になつていたらそれはそれで奇跡のようなものである。

…第一、仮面“ライダー”にバイクが無いのは致命傷では無いだろうか？

「…さてと…お宝はどこかな？」

ディエンダーのエンジンを起こした。

――

「…」はなんの世界なんでしょう？

「さあなあ…」

『それより…』

『そう言つのは白い「ウモリ…キバーラだ。

『なんであんたの服、変わらないの？』

「…え？」

「…そういうば…」

――服が変わらない。

常人には理解し難い理由で悩み始めた二人と一匹。

しかしそこは士が「まあ、どうつてことは無い」と考えたのか考えて無いのか分からぬ答えを出した。

「とりあえず外に出ないことに何も始まらねえだろ

「…」

これが彼らの いつも通りだ。悩んだつて仕方ない、それよりも

スタイル

歩み出す。一人は玄関を開けた。

――

――

「――――」

そこで彼らが止みしたのは、何故か止まつた街並み…それと分かるのも理由があった。

「…破壊されている途中、止まつた…かのよつな感じだな」

そつ、異種異形のモノが暴れてビルやら人やら車やら何もかもを破壊しよつとしているところで何故か止まつた…としか考えられない風景だ。

そして…その街並みは彼らも忘れられない街並みだった。

「…私の世界…」

「…ああ…帰つてきた…つてわけか」

帰つては来た…それも行きと同じ姿のままこの世界は止まつていた。

「つまり…俺たちの旅は…意味が無かつたのか…?」

それを言つと同時に士は「いや、大ショックカー達は倒した、意味は…」と訂正したが…不可抗力で崩れる夏海を見て舌打ちをした。

…そのため彼らは背後から迫る灰色のオーロラに気づけなかつた。

「うーうわあつ！？」

「キヤツ、キヤアアアアーー！」

気付いた時もはや時すでに遅し。彼らは飲み込まれていた。

――

「うぐ……」

よつやく士の目が開いた。
今は…何時だ？そんな事を思いながら体をゆっくり起こす。
そして、彼の太ももをまくらにしている夏海を発見するのはそう時
間がかからなかつた。

「…オイ、夏ミカン…起きる」

「…………んー…つかさ…くん？」

「ああ、気づいたならのこてくれ、立てない」

「…すすみません…」

やつこづが早く少し頬を紅潮させながら夏海は立つた。

「わいと…」と言しながら士は周りを見渡す。

「わい…」

「あこつと…また会つ事になるとはな…」

「（）答　流石は門矢士さんですね」

振り返るとやはり金髪である程度背の高い“彼”が立っていた。その背後には彼の仲間と思われる奴らの姿も確認された。暗くて分からなかつたが…

「…また、俺なんかよつか？…生憎だが忙しい、お前らで解決を…」

「…私たちだけでは…ムリなのです」

「お恥ずかしいながら」…といながら彼は一の匂を告げた。

「まずは全員そろつのを待ちましょつ」

「全員？まだ仲間がいるのか？」

「違うよ、士。僕の事だろつよ」

声が聞こえた方を見る、瞬間…士の額には銃口が当たつていた。

「バン…士、用心深くなりなよ？」

クスと笑ながら暗闇から現れたのは海東大樹であった。

「…まつたく…」

「さて、始めてくれないかな？」

「まだです…そろそろ…」

そうこうと空から誰かが降つて來た。

「うわあああああああああ…！」

「うわ！？あぶねえ…！」

「フゲフゴツ…？」

「ユウスケ…！」

ユウスケが落ちてきて士が避けユウスケが地面にクリンヒット。それを見た夏海が再会の喜びかそれとも驚きか…とにかく叫んだ。頭上からなにかが落ちて來たら…避けるのは当たり前だ。士はそう咳きながら降つてきたユウスケを引っ張りあげた…この床はそれ

ほど硬く無いのかアーフルの仕業なのか…コウスケは無傷だった。
「では…そろそろ始めましょうか?」

――

「…先ほどもご覧いただい…」

「待て」

士が叫ぶ。

「前から思つていただが…事情を言つ前に名を名乗るのが常識だりうりう？」

あえて大きな声で尋ねた。

「…」

「…言えない事情もあるのか?」

「いえ、別に。いいでしょ、僕は紅渡…貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

「…つまりオリジナルの…」

「…パラレルワールドに元の世界オリジナルも再構成世界リ・イマジネーションもありません。全てがオリジナルなのです」

「そう…か…」

士は言及を避ける事にした。そして“彼”的名前から彼の仲間の構成を知つた…が一応「後ろの奴らは?」と尋ねた。

渡は瞬時に士が自分の後ろに控えている自身の仲間が誰か知つた事を悟つた。しかしそれより早く一番左にいた…イマドキとは決して言えない金髪の青年から挨拶を始めた。

「俺は城戸真司。よろしく!」

「…乾巧」

「もー巧くんつたら、愛想笑いの一つでもしなよー…あ、俺は津上

翔…士くんも笑いなよ!」

「あ…あのう…流石にちょっと…その…テンションで接するのは…

あ、ぼぼ僕は野上良太郎…です」

「俺は天の道を往き、全てを司る男…天道総司」

「よつ、青年！俺は日高仁志…ヒビキだ、宜しくな…シユツ」

「俺は一千の技を持つ男、五代雄介！」

「ああ…宜しく」

そして士は最後の一人に目を向ける。

士は最後の男を簡単に知っているだけでなく見憶えがあった。

「…剣崎…」

「…ああ、そうだ。剣崎一真だ。…オイ、渡？話が違うぞ？…こんな破壊者生かしておく必要はない」

「何を言つんですか！？彼らの力が無ければあいつらと対等に戦う事なんて…」

「出来る。なんなら俺一人でもいい…とにかく、この破壊者共の手を借りるのであるなら…俺は俺の仲間だけであいつらと戦つ」「どうやって！？貴方の世界にはもう奴らは来始めてるはずじゃ無いですか！？」

「ああ、そうだ！その通りだ！！…そうだが…これは俺たちの問題だ、俺たちは敵がきたらムツヅブス…それだけだ！」

「仲間割れ…か」と呴きながら士はただ聞いていた。

「とにかく、俺は…俺達はもうお前達とは付き合えウエイ…じゃあな」

「ちよつちよつと…？」

「…無駄です」

そういうながら剣崎は振り返り一つの地球カイに入つていった。良太郎は追いかけようとしたが渡が制止した。

「お見苦しいところを…」

「いや……なるほど、一枚岩じや無いのか」

「はい、何せ全員違う世界で戦つていて……」

「それに……」

五代は言い始めた。

「彼は……剣崎一真は……戦いで人間じゃなくなつた……精神的にも参つてゐるんだと思つ」

「かく言う俺も、死ぬ事が出来ないのだがな」と五代は笑つた。話を聞けば津上は超能力者、乾はオルフェノク、紅は半分ヴァンパイア……とそれに事情があるそつた。

「俺も……」

そういうながら前に出て来たのは乾巧。またの名をウルフオルフェノクと言つ……聞こえのいい様に言えば人類の進化した者だ。そんな彼がむつすりとした表情のまま言つ。

「俺も意見自体は剣崎と一緒に……ディケイドは破壊しかできない。そんな奴に世界の秩序は任せられない」

「じゃあなんで剣崎と一緒にでていかないんだ?」

士は言葉に冷たさを含めて言つた。どうせまだ俺の世界に被害は無いかからとか言つのであるつ、そう思つた……が

「チャンスを与えてやろうと思つてな……渡達が信じろ信じろと頗くて仕方無しだ。なあ? 天道」

「全くだ……まあディケイドの破壊の力を借りなくては完全に駆逐出来ないと言つ俺達がまだまだ未熟であると言つ事でもあるが」そう天道が冷たく言つた。が、士は気に入つたとでも思つてゐるのか得意気な笑みを浮かべた。

「ところで……奴らとは?」

海東が早く話したまえと言わんばかりに尋ねる。

「はい……実は大変な事になつてしまつたのです

紅渡はそつ強く、そして丁寧に叫びた

依頼（前書き）

これまでの、仮面ライダー「ディケイド」は……

士「……そろそろ次の世界に行くか?」

ユウスケ「士……夏海ちやん……栄次郎さん……海東」

海東「……わざと……お世はじこかな?」

夏海「……私の世界……」

士「……ああ……帰ってきた……ってわけか」

紅「僕は紅渡……貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

剣崎「とにかく、俺は……俺達はもうお前達とは付き合えウソイ……じやあな」

全てを破壊し、全てを繋げ……

「はい… 実は大変な事になつてしまつたのです」

「大変な事…？」

士は首を傾げる。スーパー・ショッカー滅亡以来大きな組織が動いている様子どころかウワサ、海東の情報でさえ聞いた事が無かつたらだ。

「…どう言つ事なんだい？」

海東が問う…それを聞く限り海東も初耳のようだ。

「それについては俺達が説明しよう」

「…と言つても僕達も情報がほとんど無いのですが…」

そう言つて前に出たのは城戸真司と津上翔一。そして城戸が口を開いた。

「まずスーパー・ショッカーなんだが… 結論から言つと、完全には滅んで無かつた」

「…」

士、ユウスケ、海東、夏海がたじろぐ。それはそうだ、スーパー・ショッカーは滅んだはずなのだ。しかしこれがいたとは…

「なつなんてしぶとい精神力…」

「…しかしもはや残党狩りはカンタンに出来るだろ？」

「はい、僕たちもそう思つてました。…しかしあなた方とはコンタクトが何故かとれない、残党狩りに向かえるライダーもいない…そうしているうちに再び何処からともなく勢力が集まつたようです」

「…まさか…」

「そんなことが…」

ユウスケ、夏海が無氣力に脱力する。

「で、連中はどんなんのなんだい？」

やはりサッサと終わらせたいのか海東が言つ。しかし…

「そつそれは…」

「先ほども言いましたが…我々も分からぬのです…」

海東は盛大なため息をもらす。

「なんだい…それなら僕は下り…」

その時

「…私なら少しは知つてゐる…」

士達は後ろをみる。すると…

「ディケイド…」

鳴滝がいた。

「なつ鳴滝…！」

士がとつさにベルトを構える。

「まつ待て、ディケイドー今は依頼に来たんだ…！」

「依頼…？」

「そう、この者たちと全く同じく依頼だらつ…」

「同じ…依頼…鳴滝さんも…？」

そう言つのは紅渡。鳴滝は続ける。

「ああ…そうだ」

「…で、情報は無いのか？」

士が問う。

「…受けてくれるのか…？」

「渡達と同じ依頼だろ？渡達のを受けるのにお前の受けないのはおかしい…違うか…？」

「…………すまない…………そして、変わったな…大首領」

「…え…？」

鳴滝は呟くように言つた…そして本題へと入つた。

「とりあえず依頼は同じくその組織を倒してくれ…ヘタをすると更多くの命が…」

「ああ、分かった、分かったから早くお前の持つ情報をくれ」

「…奴らは名を【ネオスーパーショック】と言つ…」

…ここまでくるともう名前のネタすら尽きてくるのか…土はそういう思いながら聞いていた。

「スーパーショックの残党はある組織と合体して新たな組織を作つた。そして大ショックカー時代で既に滅ぼした世界で再起の準備をしている…すでに二つの世界がやられた」

「…奴らの目的は？」

「詳しく述べ…やはり分からない…」

「そしてこれは僕たちの情報なのですが…今は僕達が知る限り二つの世界が襲撃を受けています」

「その一つが剣崎一真のところ…と言つわけか…」

「はい、そして…もう一つは…」

渡は指でさし示す。

「今からこの世界に行つてもらいます」

指をされたその地球も他のと同じ様に青く輝いていた。

「…平和そうに見えるけどな…」

「外見で判断するのは良く無いぜ、ユウスケ」

ユウスケの独り言を土が諫める。

するとおもむろに天道と日高がこちらにやってきた。

「…あと…このカードを渡しておく…今はブランクだがいつも通りすれば使えるようになるだろ？」

そういうながら天道総司がカードの束を渡してくる…しかし数が多

い…

「なんなんだ…この枚数は…!?」

「青年！青年にはこれだ」

そういうてヒビキが海東にカードを渡す。同じくブランクのようだ…

…全世界の未来を貴方に託します…」

「あ、あ、でつでも…ばつ僕達も…できる限りの事をします…」

「ディケイド…私の依頼とは理不尽だらうが…頼んだ」

士を先頭に海東、夏海、ユウスケが並ぶ…そして士はフツ…と息を漏らした…

「俺は世界の破壊者であり、通りすがりの仮面ライダーだ…！…覚えておけ…！」

宣言が高らかに響く。

「…ハイ…世界を…総ての世界を貴方に託します」

渡が静かに告げる…

すると光が四人を包み込み気がつくと士達は写真館の入り口に立つていた。

…海東はすでにいなかつたが…

不意にユウスケが扉に手を当てる…

「久しぶり…だな…ここ…懐かしい…」

少し頭を下げる小さく呟く。ゆっくりユウスケは瞼を閉じる…すると頭の中で今までの旅の映像が鮮明に流れしていく…

ユウスケは記憶力に自信がある方では無い、だからここまで鮮明に流れるのは思わず少し驚いていた…そして、ここが自分にとつてどれだけ貴重な存在なのかを噛み締めていた。

すると…

「ははつ…だらうな…おかえり」

「…おかえりなさい、ユウスケ」

士、夏海が変わらない声で“帰宅”迎えてくれた。ユウスケは涙を堪えながら2人の方を向き目を開けて2人を見る。とても優しい笑顔だった。

「ただいま…ありがとうございます、士、夏海ちゃん」

そういうながらユウスケが扉を開ける。

最初はカフェだと思って開けたこの扉…

「変わらないな…」

あの時と全く変わらない写真館がそこにはあった。

ユウスケはこれまでの激しい戦いとこれから不安、戦い、出会いをしばし忘れて更なる哀愁に浸つた。

「…なんだこのスクロールは…」

いつもならちよつかいを出す士も珍しく空気を読んで静かに奥に入つて行つた。それに夏海、遅れてユウスケが奥に入つて行く…すると士からこんな声が聞こえてくる。

それは一つのエスニック調の王座の周りに無数の銀の円盤が積み重ねてあつたり散らばつていたり…とにかく散乱している絵だった…

N e x t . . . B E S T s i d e . . .

光有れば影あり

「…ああ、覚悟はいいな？」

BEST Final Attack Card Charge!

そう言い放つ黒い異形の者 3 彼の周りには黒いエネルギーが集まり 2 やがて右足一点に集まる 1

「BEST キック！」

Go!!

ベルトについているバックルを押し倒す。するとバックルは大音量で鳴り響く…と、彼の背中と対峙する異形の者…サイラが彼に向かって走ってくる。サイラは右手を大きく振りかぶり殴りかかる、瞬間…彼の右足がサイラの頭を回し蹴りで蹴り飛ばした。

爆散するサイラ。彼はベルトの横にあるカードケースの外側を軽く叩く。すると無印のものや色が付いているもの関わらず沢山のカードが中から飛び出てきてそのうちの一枚の無印のカードがサイラのいたところから“記憶”を取り込み封印する…

「…終わり…っと」

そう呟くと徐々にバックルを腰から離し変身を解除する…そして近くに止めた彼のバイク…BEST RUNに跨り渚沙市中央の浜音山に向かって走らせた。

彼は“高見”大智。“力オス”とその傘下の“サイラ”と言つ“地球”欠片”…“記憶”と言うものから構成されている怪物に対し同じく“記憶”から構成されている“レジエンド”のチカラを使い“仮面ライダー BEST”となつて戦つている。

彼は山の中腹にある展望台の前の山肌から少し出っ張りて出ているボックスにカードを差し込みロックを解除する…と言うのも以前ま

での暗証番号制の機能が故障してしまいそろそろ不便に感じていた事もあつてカードリーダー形式にしたのだ。

そういうする間に山肌が裂け中に通じる道が現れる…と、大智はバイクごと中に入つて行く。バイクの後輪が完全に入つたところで山肌は元の通りに閉まつた。

バイクを途中の部屋に置いてそのまま研究所内のホールに入る。

「あ！おかえり！」

「その顔は…勝つたみたいだな！」

そう言うのは“佐原 麻衣”と“一之瀬 海斗”。

「ああ、今回は楽だつたぜ」

「ふふ、とにかく「一ヒー入れますね」

「あ、G5のメンテ終わりました」

「G-01シヨットの整備はもう少しかかるが…」

そう言うのは“エリカ”、“ツバサ”、“ダイキ”の三 体。

三体と表記したのは実は彼らは人間では無いからだ。彼らは高見大智の父、“高見誠司”に開発された次世代型多機能ロボット、01-02-03-Systemsだ。

「G-01か…海斗、一応纖細な機械なんだから丁寧に扱つてくれよ？」

「ちよつ、俺のせいかよ！？まずあの状況で纖細とか丁寧とか言ってられるか！…」

「そうか？」

「大智…海斗には難しいんじやない？」

「なるほど」

「おおおおおい！？なんで麻依まで混じるの！？イジメ！？」

と、天然なのか故意なのか分からぬ大智と確實に弄りに来た麻依のタッグに叫ぶ海斗。そこにピンクのエプロン姿のダイキがお盆の上に何かをあいて持つてきた。

「じゃ、祝いもかねて軽くティータイムにしよう。抹茶のシフォンケーキを作つてみたんだ」

「「「いつやつたあ—————！」」」

TAKAMILABは今日も賑やかだった。

海の都、渚沙… 今日も波は穏やかに、陽は微笑みながら時は流れて行く…

「…光あるといふ、影あり。光が強きほど影も暗し…クククククク…」

Next… DECAED side…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439ba/>

仮面ライダー×仮面ライダー DECAEDvsBESTvsAll Riders ~イノチノメグ

2012年1月5日21時50分発行